

『2014年夏、— 樺太・千島列島・カムチャツカ — (邦船による)
感謝・慰霊の北方クルーズ』

ウォーターフロント協会 会員 野村 健司

簡単に自己紹介をさせていただきます。昨年7月にいろいろなめぐりあわせでタイトルにありますように日本の船で樺太、千島、それからカムチャツカというところに行ってきました。そのときのいきさつについて準備不足ではございますが、お手元の資料に書いてございますような順序に沿ってお話させていただきますと思います。まず、今こうしてこの場に参加させて頂いていること自体が、橋川様、橋間様のご配慮の賜物であります。私も仕事を離れてからそろそろ10年近くになります。振り返ってみますと今後こんなことがしたいな、ということを経験した人並に考えましたら結構ありました。職にあるうちは政治的などころにはあまり関わらないようにしてきました。いままで、世界や日本のことについて真剣に考える時間が私にはなかったな、目先のことばかりを中心でやってきたなという反省がございます。社会が変わって、いろいろなことをインターネットで見られるようになってきましたので、自分の時間を使ってそのようなことを見る時間もできまして、見ているうちにその一つに北方領土、それから占守島というところで戦いがあったということを知りました。占守島の戦いについて、最初自分には関係がないと思っていました。ネットに日本が悪いんだという書き込みがあって、その中に占守島の戦いは馬鹿馬鹿しい戦いだ、という意見もしばしばあって、「おかしいな。」という自分の考えを持ちながら見ていました。

私は昭和15年に大阪で生まれたんですが、東京と同じように米軍の爆撃がひどくなる直前まで大阪におりまして、子供心に真昼間B29が上空を飛んできてピカピカ光っているのを見た記憶があります。自宅も昭和20年3月に爆撃でやられているんですが、その直前に先祖の郷里である石川県とか福井県に疎開しました。そこで暮らすはずでしたが、運よく父が戦場から帰ってきました。父は大阪で仕事をしていたんですが、爆撃で全部やられて一家で大阪や石川ではやっていくことはできないと決心して北海道へ行くことにしました。先祖は石川県の出なんですが明治の初期に曾祖父が北海道へ移住して、父は北海道で生まれました。北海道の岩内というところですが、そのとなりに今は名前が変わりましたが明治以前に前田藩が作った前田村というところがあって、そのつながりで父は自分の生地である北海道へ行くことを決心したんだろうと思います。自分自身のことに戻って、自分はなんで北海道に来たんだろうなどと疑問にも感じないで、大阪や石川県福井県のこと断片的には覚えてはいますが、自分

が北海道にいるのが大前提の条件で、そこで学校に入って楽しく自然に育ちました。そして仕事に就いて、仕事中心でここまできました。今になって、父が北海道へ渡ったということは大変なことだったんだなと思います。父が北海道へ内地から渡る決断をしたのは昭和 21 年で戦争が終わって間もないころだったんです。

占守島のブログに「あれは、馬鹿馬鹿しい戦いだ。あんな犬死するようなことをするのは馬鹿馬鹿しいんだ。」という意見がある一方で「あれがあったから国後島でソ連の侵攻が止ったんだ。」という意見もあります。「占守島の戦い」は大激戦だったんですが、戦った兵士は指揮官以外はそんな意識はなかったと思います。しかし、その結果実質ソ連軍が北海道に入って来なかった。その原因はいろいろあると思います。アメリカがソ連の北海道侵攻に圧力をかけたようですが、それはそれとして、スターリンの意識は北海道の少なくとも半分は取るという考えだったそうです。実際にそういう命令を出していました。北海道の半分ということは実は全部を取られるということと同じで非常に悲惨な状況になっていたと思います。敗戦時に北海道にソ連がいるということになれば津軽海峡を越えて北へ向かっていこうなんていう考えは、当時であっても出てこないのではないかと。北海道から南の方へ移動しようという考えはあったとしてもその逆はまずないだろうと思います。そのような中で樺太の部隊が猛烈な抵抗をしてソ連軍にかなりの損害を与えて、ソ連が本当は北海道へ入りたかったけれども入れなくて直前で止まらざるをえなかったというのは事実のようです。それは占守島の戦いが原因ではないという声もありますし、スターリンの命令としては樺太から来る舞台に国後・択捉をやらせる。カムチャツカからくる軍団はその手前ぐらいまでという大まかな話はあったようですが、仮にそうだとした場合、占守島の戦いが降伏という行為をするための全く正当な自衛戦だったと私は理解しています。そんな状況でソ連のほうも日本が降伏文書に調印する 9 月 2 日の調印時刻までに北海道には来られなかった。その結果として北海道本島は無傷であったというのは事実です。それで、終戦直後から津軽海峡を北へ行くことができました。

そんな考えに至ってからはほどなく、北方行きのクルーズ企画が、ある旅行会社から出ました。仲間を求めて多くの人に声をかけたんですが、結果はゼロでした。ただ、その時のクルーズの内容はカムチャツカとか千島の北の方までは行かずに得撫島の北側をぐるりと一周するものだったんです。その広告が出たのは平成 20 年だったと思います。船はパシフィックビーナスでしたが、その時は年齢も 60 代で、クルーズも毎年やるんだろうと思って見送ったわけです。ところが、実はそれ以降そのような企画は私がアンテナを張っている限りではありませんでした。

平成 26 年 1 月にこの周遊の広告が新聞に出ました。その時は 70 代に入っていましたし、これは毎年あるもんじゃないんだし、私にとって最後の機会かもしれないと思って仲間がいないならひとりでも参加しようと動きだしたんですが、申込期限のギリギリで、仲間が一人みづかり、彼と二人で行って来た次第です。人づてに竹内先生のカムチャツカ研究会のことを聞きまして、橋川さんから J A P O C A 事務局長の遠藤博さんをご紹介いただきました。昔、カムチャツカ研究会のことを聞いていたんですが、遠藤さんのところへ行って「とにかく資料がいくつかあるからそれを自由に見てください。」ということでした。たくさん活動の資料があつて、レジメにも書きました「カムチャツカ研究会 10 年の歩み」（竹内 良夫監修）がありました。それほど厚い本ではなかったんですが、さっと流し読みしましたらその中に占守島のこともありました。私はその頃、どんな旅行をするにしても港湾を意識して見に行こうという気持ちでおりました。ところがこの本を見ていますとほとんど港湾や空港を取り上げているところはなくて、それ以外のことで幅広い活動が書かれていました。私も港湾という型をはめて考えることもないだろうという感じで本を見させていただきました。読んだ結果、別の意味で大変参考になった次第です。

昨年の 7 月、お手元にお配りしましたルート地図に実施と予定とありますが、その実施のルートのとおりに行ってきた次第です。乗船したのは小樽港です。小樽港までは空路とバスです。小樽港で諸手続きをしてそれから 9 日間のクルーズに行つてまいりました。当初の予定ではカムチャツカからの帰りは苫小牧で下船する予定でした。そのころ南方から大型の台風が来ました。それで帰りもオホーツク海経由で小樽で下船ということになりました。こういう変更は乗組員にとっても乗客にとっても関係港湾にとってもプラスとマイナスがあり、それで振り回されたりしました。

私の目的はクルーズ中の占守島に最接近位置で、旧陸軍第 9 1 師団将兵 2 万 3 千余の英霊に日本国民の一人として、感謝・慰霊の意思を捧げることでした。占守島で戦ったのは旧帝国陸軍の最後に残った師団です。師団本部は手前の幌筈島（ばらむしろう）にあつたんですが、そこを起点に 2 万 3 千人の将兵がおりました。戦闘集団の特徴は航空兵力はほとんどないんですが、強力な最強の戦車部隊がありました。約 60 輦の最新鋭のフル装備の戦車で、これがあつたせいでソ連の猛烈な攻撃を弾き返しました。ソ連軍を最後に海っぺりに押し込んで、それでやっと停戦降伏というステップに入れたそうです。結局戦闘そのものは事実上勝利で終わったんですが、本部である札幌の第五方面軍の長官、大本営がポツダム宣言を受諾していて、通信機器も最新鋭のものを持っていますから上層部は既に知っていました。8 月 18 日の夜中 1 時か 2 時に国籍不明の大部隊が攻めてきたんですが、札幌や東京の大本営本部は 8 月 22 日には降伏し

ろとってってきました。私は最近知ったんですが、降伏することも一大事業なわけです。国軍同士の降伏というのは非常に厳しくて、こんな例は世界にもないというほど整然とした日本軍の降伏というのは見事であり今後も世界に誇れるのではないかと思います。そういう降伏の非常に厳しい状況の中で停戦交渉のために使者も軍使も送っているんですが、第 1 回目の軍使、長嶋厚大尉は佐賀の武雄中学及び陸士の出身で部下 12 名を連れていっています。部下は途中で全員殺されて、軍使である長嶋大尉自体も捕虜にされてしまった。ソ連軍は降伏の責任者として認めないということで、三度目に師団長の次の参謀長が行ってやっと降伏が認められました。それは 8 月の 22 日でした。ソ連軍はかなり出鱈目で当時の国際法規からしてもいい加減なことをやっていたということが最近の本で分かりました。資料にある色摩力夫さんの「日本人はなぜ終戦の日付をまちがえたのか／8 月 15 日と 9 月 2 日の間のはかりしれない断層」を急いで読んだところ、この方は戦時中は陸軍の幼年学校にいて、終戦後東大から外務省にはいり外交官としてチリ、コロンビア、グアテマラなどの国の大使をやった方です。読んでみたら大変奥深い本で、外交を非常に勉強されている本だなと思いました。この色摩さんの本を読む限りにおいては、国と国との降伏というのは軍隊としての降伏と国と国との降伏ときちんと区別しなくてはいけない。その点でドイツとは違って日本はきちんと区別して降伏をしていた。日本人が意識していたかどうかは別として結果的には東京湾上でやった降伏というのは降伏文書、それからポツダム宣言、その前の開放宣言、それらの流れからしても大変優れたものであったという評価を得ております。ただし、現地部隊が戦闘をやめて降伏するというのは降伏ではなくて、休戦協定を結ぶかどうかということだそうです。ですから、占守島の戦いで降伏というのは本当は休戦協定であると私は理解しております。防衛庁も総括をして報告書を出しているようですが、対外的には外務省が全体の総括としてまとめた報告書を出しています。占守島の戦いについて出したのは昭和 50 年代で、敗戦から何十年も経ってからです。その中身は、外務省特有の責任を曖昧にするというような考えが非常に強くて、知っている人が読んでも訳がわからないようなものであると外務省のエリートでもあった色摩さんも言っています。

第 91 師団の戦闘状態はどういうものであったかということですが、数字が日本とソ連側では全然違います。日本側の特に実際に戦った軍関係の方の話によれば、日本人の死傷者は数百人に対して、ソ連側はその 3 倍はやっつけたと言っています。ソ連側が対外的に出しているのは日本側もソ連側も損害が千数百名。ソ連側からすれば、数よりも日本は戦意を失っているから日本を叩き潰して、師団本部がある占守島なり幌筵島なんかは 1 日で潰して南下するんだという意図で来たことに関しては完全にソ連側は負けているわけですが、スターリ

ンはそれだけのソ連兵が血を流したんだから、島はソ連が取るべきなんだと逆手にとって日本の領土に関する主張にはいっさい耳をかさないという論理に切り替えたということです。スターリンというのは頭も良いし、徹底的にやる人間だったということが分かります。

地図を見ますとカムチャツカ半島の先っぽにロペトカ岬があってその南が占守島、千島列島です。占守島については、日露戦争の前に樺太と千島の交換（明治 8 年、樺太・千島交換条約）をやっていたから、占守島は日本領であると堂々と言えるわけです。明治時代郡司成忠という方がぼろ船で探検隊を率いて占守島まで行っています。とにかく明治以降、ここは日本であることは間違いはないし、実際、別所二郎さんという方が親子で住んでおられたところです。こういう話をすると必ず先住民族のアイヌの問題に突き当たりますがソ連との間では関係ないでしょう。しかし、今、北方領土というと択捉島までで終わっていますからおかしい話なんです、現実の外交をそういうふうに重ねてきているからしょうがないなと思いますが、先人の努力を考えれば日本共産党がある時期だけ言っていました、千島列島、占守島まで全部日本の領土だよと。特にアメリカ、ソ連に対しては言わなければならないのに勝手に自分たちで自己規制をかけて千島を全部放棄して「国後、択捉は日本固有の領土」だなんて苦しい話を今になってしている。こんな馬鹿馬鹿しい話はないと私は思っておりますが、こんなことで後世の人が苦勞するよりは一旦突き放して、ロシアがいつかおかしくなることもありますので長い歴史のスパンで「ロシアさんも歴史をねじ曲げていつまでも世界の歴史に汚点を刻み続けることをやめて占守島までちゃんと返したほうがいいよ。」ぐらいのことを言ってやるべきだと私は思っております。

私はクルーズの契約の段階でも肩書なし、個人でやっておりましたので、個別の目的は一切クルーズ会社の方には出しておりませんし、実際に船が樺太を出て、明日はそろそろ占守島に近づくという頃にフロントに行き「本船は占守島をいつ頃通る予定ですか」と訊ねました。すると暫くしてチーフパーサーがわざわざ私の部屋まで来てくれておおよその時刻を教えてくださいました。そのとき初めて「全く個人的に、個人の資格で占守島の近くで昭和 20 年 8 月当時の師団将兵各位の英霊に感謝と慰霊の思いを捧げたいのです。」と言いました。

7 月 8 日の夕方、頃合いを見計らって、左舷廻廊デッキに出ましたら、パーサー一他数名、士官、幹部がおられ、特設の祭壇があり、日章旗も掲げられていました。「ささやかですが、本船士官有志で調べました。献酒、献花を自由に行ってください。」とさらっと言われました。パシフィックビーナスは硫黄島や南方へも行っておりますから、そういう時には盛大に慰霊式をやっていました。

ここはソ連の管轄で、ウクライナ問題もあり日露間がどうなるか分からない時期でもありましたから、ソ連にある程度配慮して、船長は入らないで士官有志だけであの場を設営してくれたのだらうと思います。7月でも千島のあたりは連続して晴れているということはないんですね。ちょっと晴れても絶えず雨雲があって、70年前の戦闘の時もきっとこのような天気だったんだらうと思いました。昔は幌筈海峡、今は第2クリル海峡というんですが、関門海峡よりは若干幅はあるが、非常に狭い感じですか。それをオホーツク海側から太平洋側に抜けるということは南に抜けるわけです。その直前まで曇っていて、島はあるはずだが全然姿が見えないという状況がしばらく続いておりました。ところが、直近の状態になって海岸部の霧がぱあっと晴れ上がりました。東京でいうと19時から20時に近い時間です。あそこでは日本標準時に2時間プラスします。現地であれば夜の10時近いんですが、雲があると暗くて陰鬱な感じがあるんですが、まだ明るい。通過する瞬間の15分間ぐらいはパッと明るくなって西日が入って占守島の西側に夕陽が当たって黄金色に輝いて見えました。そこで自分なりの慰霊をささげました。気がついたら、周りにけっこうたくさんの方が来ていました。いよいよ暗くなって海峡ともお別れが近づいた時には、自然に『海ゆかば』の唱和となりました。真夜中でも私は一人で出るつもりだったのですが、夕方晴れてくれたおかげで慰霊を尽くせたと思っています。個人的にはこのクルーズにかけた時間、かけた予算に対しては数倍の価値があったと思っています。いっしょに行った仲間も同じ気持ちでしたようです。

日本のクルーズ船というのはどの船も素晴らしいと思うんですが、この船は世界一周の実績も持っており、船齢も20年を超えておりますから相当なご老体なんです。船の手入れはよくやっているし、私が船内を見て回って、船の活動、事業も素晴らしいことをやっているなどある意味感動しております。日本人の良さがよく発揮できている職場だと思います。士官は皆日本人でしたが各パートで働いているメンバーはそれぞれ国別の外国人チームで対応しているようでした。憶測ですが、レストランはマレーシアのチーム、甲板作業、テンドーボートの揚げ降ろしはフィリピンのチーム、居室清掃、船内清掃はインドネシアのチーム、深夜以外はコーヒー等飲み物、スナック、出来立てのケーキを随時、自由無料でサービスするカフェはロシア女性のチーム、などきちんとよく教育がなされていると思わせるようなきびきびとして誇りを持って働いていると感じさせるものでした。

本船のフリーカフェでのロシア女性の愛嬌ある笑顔はペトロパブロフスクの公営市場の店員の表情とは違う民族かと思わせるほどでした。その他は後の時間でとさせて頂きまして以上です。ありがとうございました。

《講演レジュメ》

『2014年夏、— 樺太・千島列島・カムチャツカ —
(邦船による) 感謝・慰霊の北方クルーズ』

野村 健司 ウォーターフロント協会 会員

I. (なぜ、どうして、ここウォーターフロント研究サロンに)

II. クルーズ参加の目的

クルーズ中の占守島に最接近位置で、旧陸軍第91師団将兵2万3千余の英霊に日本国民の一人として、感謝・慰霊の意思を捧げること

III. 申込み、契約、予算

- ・自分にとり、最初で最後の機会
- ・約40万円
- ・同思、同行の人

IV. クルーズを終えて

1. 目的達成度 — 約500%

IIの目的レベルに加えて

- ①行程、天候に恵まれたこと
- ②目的に対して船長、有志士官の理解と慎重かつ熱い支援・協力を戴いたこと
(占守島に対面する特設の祭壇ほか)
- ③(事前案内がなかったにも拘わらず)乗客中に同思同胞が多数おられたこと
(合掌及び自然の“海ゆかば”唱和)
- ④クルーズ船の各部門それぞれで複数民族・国籍別の要員が節度よく、勤勉、誠実さを感じさせ、乗客に安心感、信頼感を与えていた
- ⑤より良い船室についてのアドバイス・斡旋(細かな配慮、サービスか?)
- ⑥想定を大きく超えたこと
 - ・島、海、山、雪、雲、霧、気流、風、フィヨルド、鳥、海洋動物の多様性・変様性とそれらが刻々と変化する素晴らしい眺望
 - ・専門的で的確な説明があったこと
- ⑦起こると困ることの不発、回避
 - ・日露関係悪化のエスカレートとその影響

◇◆◇第74回ウォーターフロント研究サロン◇◆◇

- ・ロシアC I Q、格別の問題見られず
 - ・台風、地震、噴火等による災害発生
2. クルーズでの個別事項（順不同）
- ・寄港地及びツアー コルサコフ市、ペテロパブロフスク州都
 - ・ツアー
 - ・港湾、航路、海峡、フィヨルドの様子
 - ・船内の様子（案内、新聞、テレビ、ビーナスカード、水の利用と処理、食事、インターネット、パーティー、ドレスコード、アミューズメント）
3. 関連事項・文献・リスト（順不同）
- ・ ビーナスクルーズ関係資料一式
 - ・ ビーナスクルーズ関係写真一式
 - ・ 竹内 良夫監修「カムチャツカ研究会10年の歩み」（平成十五年）
 - ・ ユーチューブ動画”占守島の戦い（2009年）”、『サムライ魂～占守（シムシム）島の土魂部隊(1/6)、(2/6)、(3/6)、(4/6)、(5/6)、(6/6)』
 - ・ 池田 誠 編「北千島 占守島の五十年」（平成九年七月十日）
 - ・ 色摩 力夫「日本人はなぜ終戦の日付をまちがえたのか／8月15日と9月2日の間のはかりしれない断層」（2000年12月8日）
 - ・ 大野 芳 「8月17日、ソ連軍上陸す／最果ての要衝・占守島攻防記」（平成二十二年八月一日）
 - ・ 浅田 次郎「終わらざる夏（上）」「終わらざる夏（下）」（2010年）
 - ・ 上原 卓 「北海道を守った占守島の戦い」（2013年8月10日）
4. 北方領土問題との関係
- ・ 北方領土問題とは何でしょうか（そもそも何が問題なのでしょうか）
 - ・ （北方領土問題があるとして）日本は主権国家としてどのように機能しているだろうか

以上（2015.2.27）